明星抄

御法幼竹川

白宮紅梅

十六

御法

巻名以歌号之源五十一歳ゟ去年ゟ秋まで
の事なり

紫ゆゑ　一とせ物ゆかしがりしの業平ゟ
みくり其業とふくにとびて物ゆ
ゑ　源の元地
ふかくとはたちまち
うちめさきのうつ
ゆかいあるはずに
さるい吾はなりも
物ゆそれをとさつ

ふかくとの氏中地
ゆゑ氏なる物を以り
さ海を語家と
源氏元地ふかくのそむる
なるべしと

御茶水図書館蔵
内閣文庫
青緒図書

いとをかしうしさ　　はふとしたがうしさ

あさましうる　　花のあるまいあざれうるとこそ云ふとこそ

河海にあさましたがというり河海流なるべきさま

武士の方をも　　はるかのうされびつこ物りとこそ

おのようにうめくさかぐしにまぐらぬ

はるかなれどいとうどこそまいくいうり

さて世をかへて後世をつとめ給ひ

とくしうさ　　源の兼てもおぼつかなこそ

きさいの宮うち　　后宮とあるは一人の嫁なる

一人の花の女御たちの　　宮人ばかりの方にこそ

家にて始てみくうり

石の上　　ふりぬる所といふんなる地

面ひんう　　二条院こそ

にしのめりこあ　　はふとしの雅宴あり

となり深さなる　　結縁する人々功

地ありさとこそ

行幸す　　法事の末つかこそはふとこそがて

げて羊のあるこをあるこそ

こそして　　白こそ

おりかめ　　こそこそ採菓汲みたこそ

所を菓よこせてうりよれつるは早りていく

家を兵今うちひきていつる面白こそ

はるかに
大きなる
みどりいろ
てまばらにて
たきまこと
千歳給侍心也千歳給侍とは
日を始て千歳の齢をもつて
こゝなり
れ善ふ云とまる
迷うとう
みなんの
のこりすくなし

千時奉事經於千歳提婆品

はるかに年は善ふ云とあり
河海あ流れふ
見えのこと
はるかに乃中なる

衣の
嚴重なるをいう
こしめて
はるかに
神力世を去ること
時の至
たりかに
也を嚴重乃
中文
ひんこの對

衣の　云衆除て云うり行ふ明ふと花
嚴重なるをいう
はるかに
はるかに
神力世を去ること日縁を結ひめれい
時の至　明ふ思惟をして後世人のそ
たりかに
也を嚴重乃
中文
明ふ中文
ひんこの對
寢嚴ふ
ふいかも中文の

中宮を始め奉りて女房達
きこしめす
名ごいめん　源氏中宮に申給ふ
しら波はすえ末なれる
御りやうのこゑ〳〵音方〳〵御りやうの
方〳〵よ　花宮中宮に申給ふ
はつこの宿の中宮に申給ふ
しよはつこの家に
たづね来にまゐりまゐる
家通を　明石の中宮に申給ふ
みとうのう　中宮の御中に申給ふ

くまでよりくいまゐりまゐる
ゆしのふなとの　家にそいとくしきこゑ
ふね　はつこの宿方ふさふ歌人〳〵也
こと絃なとに
まだしりきとそはつこい音方にゆり給ふ
三宮　白雪の
うちはらへより　五戈なる人〳〵
家より　今こと
はくをこう　中宮に
御こゑりあるひの　はつこに
さうへうん御りい　はつこ宿
はつこ音方ふこの給ふ

物之あはれを御ふかく物の花を尋ねてよめる

けしきなるへ

姫宮　女一宮

うとかまし　うとかまし

さるにあはれ　秋の夕いろなる色ふかく

まことにうしむ計へ　の立てさ

あるさにも　ふかく中宮ふかく方て寄り給ふ

つきやうもあるさま

宮う　ふかの方へ深り給ふ

こよなうやせ　ふかも

あのはまへりて　中宮のはあ

うたりの　ふかの

をとれ　ふかの

をとれ　ふかの

をとれ　ふかの

ありさへ　ひうる

吹出るをいう

風もせて　源の斎宮

きとこきこをあり　ふかよをとれ給ま

秋風よ　中宮のはあ

秋分もまにもあぬ計　世の月光をいう

かてちとせを　不常住のこ

今は海ゝせ給ぬ　はふと中宮へ申給ふ
いとあはれ　秋雪まて礼をとゝ
ひづひありがゝ
ゝも申給ふて
今のとゝめをとゝ
事を中宮へ申給ふ
あはれ　明闇也
さゝ人　ふねさゝめる人のさゝと
はゝの事を　大殿の御
一日一夜　出家の功德のゝ
まことにいとゝ
ひとゝなさゝ　はるゝ　ゝ
はいとに　されと傍とゝ
夕雪の
ありさゝ　雪の
はとのゝをゝ　源のはふとの
こゝの　夕雪
うゝふ事も　源の
ありあひて
はやゝ　光宮
ひのいとあゝ
とゝ
ゝ　所
ゝらゝ
ゝ
夕雪

いすゝへの　　文無二夢之事
人よかりて　　源のうちにて殿にお話のとおり
月のうち　　八月九日葬送ありし
十五日にうせられて
　　はふこ十四日にうせて十
　　五日よりの葬送　家より迎よ書ル　若人の
　　続きづゝり只けゝ　ゝうとゝ
　　ゝうのよなくさめ
　　大ゆゝ葬列
　　大ゆゝ乃ゝ
風のまゝにうて
みゝきりの経　　絶正等の時入ゝ
あゝゝ佛（ホトケ）　　弟勝乃ゝ
いすゝへの　　あり殿ゝ夕ゝ今ゝ
みゝひ出ひ事ゝ
そゝうゝ人　　ゝうり弟ゝ
いすゝへゝり　　源のうゝ
続きゝゆゝ乳を　　次ゝ人の時はふこの張を
みゝゝゝ殿ひ事と云張ゝられど兵ハ
殿分のゝをつゝとゝ　　ひつゞけて吾なゝ
濃（ホリ）ゝる弟ゝ
いゝけゝ　　毎ゝ殿毎相違みゝゝ別
殿ひ事
やゝまゝ　　公方ゝ
こゝ此　　八月ゝ

夢ごとを惜みかなしび毎も
今はかぎりなきものゝ数多さを
かなしびなげくこゝろをいとり
夢ごとを惜みかなしび毎も
世のあさましきさまを
なげきさい
世のあさましきさまを
悲傷も尽まくとあるこ
ゝろもつきておもふこゝろにもみちり
めとめあはひ
後世のみとめあはひ
色きとゝり
うすみ
世中は
冷泉院
軽腫し
ひふとをかあるこゝ
秋は世中哀し

秋のあるこゝのれるをとり
のりけり
朔とのゝり給ひ給ふ
秋たつるこゝろとゝるこゝろ
いはに垂こゝ面白こゝ奇なり
女こゝろ
秋分は月通こゝに和を
こゝろ給ふ幻
今るやこゝ
とゝひるこゝ
世のゝ海事をきゝ
中文
明御法

幻

巻名以歌号之源五十二歳之正月より十二月
までを次第によせるなり[illegible]を高きいと
き心ばへ[illegible]なきを[illegible]
せり書ざまにあるべかりの
事共を　百千万の嶮(けはし)き事共を抱てとにあり
たまれとも[illegible]
とにいまいのやうに
[illegible]
つゝ[illegible]
[illegible]

まつ宿ハ　素性法師なとしていへり
うたとめて　源をすぐさめんがためなり
これ之大きの素性そハなきなとゝ之
これそいひ乃志らに　法師の流さ後之
まはてよきる　其外の人ハ脈を後さるに之
ますされなく　源氏生飢なきなまんとして
すみさいうをはをおぐさめよすると
ひのきさけ　けの字清濁あるあり濁て
積時ハ次のなかどに引さづる清て積時ハ
引避之為説とも可用く
流をおりそうすへき　禁止のなみづり

詠ひし事あり
ひと海りつては　権秋院杉かろ月秋なとと
の事なり　さつ海人之
それおりのを　女三宮之以乃葉の生よれおる
入道の文
書しぼんし詠ひし時れ事之
著そしも　道さらも今はなきその意なりて
いうなめをゑいさるへき
明かれてしも流りしに　曙てしもけしまれ
字にあやりてこ流へし
浮世小ハ　其きたも源ハ当をと様んと云ひ

しる人めをぐりそ春をめるうゝ
ようゝ春ゝ
秋はきゝゝ　　春はきゝゝみのいかゝよゝまん
けさよつまそい　　源の朝臣
御かゝの　　春ゝきをさゝさんゝめゝ
めなゝすんゝ　　はゝゝ梅人ゝゝ也
うゝひ松　　春をよみゝゝあゝさんゝのかゝ
とゝるゝ也
人よむゝん　　人よ対面のさいそれと事のゝる
ひかまそ　　世界の男ゝゝ

ゝゝゝゝ　　然備れ云も平はにゝりゝる也
洞の海　　墨源の気ゝ狩いをしなれやゝて
ゝゝゝゝ　　ゝゝゝゝ
きゝゝ乃ゝ　　明石中宮れ海ゝ也
ゝゝ　　白雪ゝゝゝゝ
毋はの紅ひ　　はゝゝ遣云をの紅ゝり
うゝてゝ　　ゝゝるゝ花のあゝゝ花ゝ狩ゝ
ゝゝゝゝとゝけ　　奇怪ゝ也ゝ二条院ゝ花也
云ゝゝ　　ゝゝゝ云条院の事也
ゝゝゝゝゝ世のゝ
ゝゝゝゝゝ　　源ゝ云
ゝゝゝゝゝ　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うへをさばきし

ほか文まろうきこゝろ　此語りて二条院はす

とみる歌ありされど此六条院の歌をもまい

らせ給ふこと又六条院二条院の分別なく

しその歌の幼雅(ヨウチ)の心なるべきか

おのれが升乃　古来よおのれが升の秤もなく

毒さく世風ふまるせし　此奇いありがたき

事をいへり此几帳をとそめぐらすべきるいやど

き事なれならこそいへりと判じ給ふべし

意よまれぬのしん　二条ふむかひて隠遁(インシン)わ

氣つきたるをも給へり

三条の心地

此ふ此の歌なりやうに又

いで柳しと

はつの歌なし

源も御ありすくおとの歌ふをはらしくとこ之

此そ此袖を　此ぬ此袖までも又源のそれも浅し

まひのいろあひ　除服(ジヨブク)きる人之

身つかれ此なるをし　年紹(ネンシヨ)の分別をも心得

つり志(コヽロザシ)の浅深(センシン)よりて心喪(シンサウ)の服の用意之

今はとて　此ふ上の心とゞめて木草をも植

給ひし木も御身此世のがれるゝはかしや

たそんといへり

こゝろさ此旦ろ忘　家隆をなしかに六条院

とみしかり
家は佛の　女三宮之
わきしらつる　薄きな之
河の花　時花も佛の借事にまかせて之
春にひとせし人　紫上之
對乃まく　紫上は法方之
袖し人かすさ　匂もうちも嘗尤きに白之尤
らんきん人の形う念しき
君かは春りし　女三宮の法事之何ともく
の形へと抱きひもかしと以後不源の再にまち
て字形かくさき君かは春もよそにかれかし

その事のさしてとも　気よつきそも紫上
のうすきひおもむきこゝ一かし家ぞまよふかと
さひしきはかりしと也　和泉式部　今いくそよう
のこくさのせく志る汁の基まうちもかと
以前云とおもし
みうき海　又紫上をさひおもまし
人と哀と　気より源の緒之
大方は世よつきて　源二人へうりとひはるし
あうり時は命をもうらくさひし之
ひとりすらは　紫上の事ひとつ摘まへの絡かざる之
おもきのへめよ　明石上は題詠之

ゆゑ一のこと

みさめ屋を沢地へ行るもの院のほうをひろう

遍昭（ヘンセウ）みてしれ歌いまれなるうま

孔雀ありのこと

ものをいをすくして

五

孔雀

さうすと也

文ちう　今これ文遠也

うこと歌よ　はは即位ありてこと

はまてこのこと　源の羽

こさいの乃文

ひあうと　うすさこ

それのおうこと

風まれ雅乃雅しあうこ

云まだうしうこと

分つこと

をこのこと

云界のうたも乃こと

やしあう　ほうこと

こ所中れ出さ　いりれ中をいう

つてもあ清つさ　家にとまり行ふこと

女ま　はすの字新（ヒラ）暮してこと源もと云心也

あくも　乃にせうこ三月の事なれいこ

分のこい　ひこれ者分をこと也源

れ歌さまの文出　源

乃ちあ　源を乃ちこ乃ちる也源の今乃

新のもめで行こと者分もあの乃ちて

花うんともこたらぬ。地文の美いはふこの後
源氏物語をもうるるもののおもしろ
ありかたう　明石の君書を海に
なげめさまもしさ　弟ぶぶこ明石のことをいめ
ぶまもきものにしかりとも
人のこころをもつさりき　人のこころをぶへ
源ゆうくこを知るとも花鏡ゆく
夜代語方より
変装　ところ計とをきて云色ふるさ
ひもすこ後へしとこぶこうめ代衣裳みわ
綱しかひすすけてそひ制ふつき

とぬずこやいとをとぬとい傷進をへしとも
こころもの　云界へりけて後のてり計物
乃奇ゆう
さとに出ひく
紅のさはこる
けれこそ　変といふんも
さもこうい　こるべのあ代変河海よ書あこるさ
けれ奇いるべ候の色祭の日うるひりて弟社
ふこもせて心りゆ申れいはふこをこるべりて
さるひ後ぶこをあるとい今はふこまし海さ
ずて後をうしるひうるこれい歳のるぶ物

源の仁恕ある地
椿ゆ色こ服装代こ海代色
けれこ

もと連より源もかへしてこゝろをなどいふもと連
ちそ給ひめるよしを
なくなん　中将兵ひとりかいおはひとくになるを
もけざるへし（しと）飛鳥橋よりいせより
さこれ　時節をうつしてけるを南西つし
ありけをかはせる　翫（ミエウ）してかほ子規（ホトヽギス）を譲之
色に女花梅よ子規ありなかなむせる時うつゐ也
まつかけて河邑　蕭々（セウ）暗（アン）雨（ウ）打（ツ）窓（ソウ）声（コヱ）也
いろのきをねよ　紫上にてとをまし給ひし（しと）夕霧の文
ひとりてきこえなん　御つゐ時をうすにとよかくせさんや
ひとり行く　源乃翔

ふりいでて　源氏須磨之
こゝのゑ　夕霧乃巻
おりのれうし　雅翁此翔のうち
きのふ今日と　夕霧の翔八月此周忌（ニウテ）もち
濡てもしかり
なにえたり　源乃翔
あまり此像歌　雅ともありし
みゆのこと　夕霧の翔曼（マン）陀（ダ）羅（ラ）経かどれるを
紫上かくれさせ給ひて後のことをうつしかの御法を
さざなれど読物てこれよりいとよりかきを
てこゝろへし

それいとうそめあるべし　蜀の糸はるとようぶる
ずいつくるみもゆくよいもくすの蜀の音分づく
の宿世なりとこと
ことにこう　夕暮の蜀の音遠もあまりこのこの
いふとりそら　いつくとかくこの河るいつ
にとりそらの蜀よりの引音あの糸よいこう
の蜀ひ出めとうこうこうこの蜀万猶悲傷
ゑ中ゑも聞りの蜀ばなるれかのさぬく
郭公　ゑといはるこをいつり
蜀なと　第の蜀なるよ地
なとせしよん　第二の蜀を云也

いとあつさ　六月なり
いふかはかりの　花の蜀を云也
ひとつしの蜀　蜩（ヒグラシ）の蜀をなて　蜀のこや数
とやうん蓍（キリギス）鳴夕ゆけ此屋まとすぐこといい
つるをとひおのなるへし蜀りのこ蜀なと云
ふ蜀のこや数とやうんの山面日
つしくと　蜩を虫といふ面日云蜀極
なさ蓍めるよ蜩さへくいくこほよくぐこ
とかまとといふるくとと云云
夕暮よ蛍とんて　蜩（ヤウキヒ）老人地の云あり
ふる蜀知　蜀の云さのる蜀もなさと也

さるさるの　あれの忘れ草生ずるにてぞ
よりて別し時の名ハ忘れしざると也
つのもち　八月つるぢ
今まてつるる　人の為もあらぬ世を今
さてよくてもへあるる世にてあり
廿四日　総して正月と四月九月をいう
寅よい月忌をいう
ふりしかと　朝毎月いかも毎日毎夜
くゝ神ひつる杉いなりさ
きねを海る　つゝを祈ざる事
あか宮を　名をさへて幻術の士よ法する

幻士ハ蜂ヒギウ月ゼザイ
何ものにつきても　花色ハ色ハ当にて
義士に移て
以中ハ　色弁当の兄弟
いすゝへ　つゝの文節よ文
ふり移ひ事をと
文人ハ　月蔭カゲのかづゝまを世ていり書分ハ
月日ハ乃未もたゝさると
世をさり移つゝさ
ゆ宮治よ移りてみしう
やまいあり　湯殿院よ隠遁し移る

うれはる　ぶ上の、ほ沼こ
みとせ世れうこ　分ひのとそひな俺そみ
ぐさの沼そみとせの新ん必けり
去てのの山　あとと筆沼こ
めしく　ぬ〜しく也
うきつめて　うきあつめてと也
ぬ未なうさ　佛名の等師北源氏のり
未を彩ふこ忘也
うらいやうく
れあそひみとも
ぬよりこる

白頭夜礼佛名經の心あり
周忌追ぬ追いこ
弥勒などなるへし

去まて乃
うれはる　色付とい衆ひうこ沼こ
て弥栄り出沼みとこ　ぬ狂いこりぬ沼り今日始
ぬ文　白文也
物之みと　古新敦忠新上の白を俊用こ
ついうら乃　院の拜礼とをびうるへ
とて用さあ沼こ

大永七臘五

金葉中ノ
播川院法橋源俊重ノ或夕慈円ノ中ノ
よそへる哥
はるひらあまのさかをにさをさしてさふも
独身ひとりいそをこそこれつ

白宮

巻名以詞号之白兵部卿共又薫大将共云
抑中古ノ雲隠考ノ云ノ源考ノ云ノ古人ノ雲隠
哥ノ也ノ雲隠ノ云ノ別哥ノ河海ノ云ノ
番ノ也ノ云ノ孔雀ノ源ノ云ノ人ノ也ノ雲ノ云ノ
ホノ云ノ来用ノ也ノ
也ノ仮名ノ或ノ
ウノ云ノ
孔ノ式ノ
作物語ノ
系等ノ類者假諦也此雲隠者中道也釈尊

五時之教此物語之中にうかがはれり五十四帖
皆亦有亦空門之心也遊色之道も終ハ佛
道に帰する媒也とかり畢竟此雲隠ハ名ばかり
にて不書之説家可然其故者物語一部之
中衰情をかけるハ人さまくにて事つきかり
けれに源氏崩御事をかるさば言終も及べ
かるに同じ様なるハ一部の異なる仏
の御心玄々玄者也
幻巻とハ自分の巻とハ分ぬ巻ハ
かりハ薫の巻歌ハ年紀をかること幻巻ハ
てハ五巻也今巻十ヶ年にて元服ハ
歳かり十三歳まで源氏中にゆかり
かること総して宿木ハ巻まで紀雑乱かり
別ハ巻也かり花宴ハ十九歳迄の事
かりとあれとも女歳の言迄の事みかり
ひかり出れ給ひ 源氏物語の後を云
そこかとハ久雲の住家之 朱筆日明石中宮ハ
殿の家くも相ハ中に含めり
かりあれみてを
さんハ源氏の住家とハ
当代の三条 白河院也
家ハ第五 女三宮の住殿ハ蓮之

海えゆかきかいかい　按鮮の人ふれあれたと之
さる法なとしひま　源氏は須末なとへ人は出す
尤り源の御なり須磨よりは人の見えしこよか
と也見も源氏の御威光故之
かしつよ此のしさせ給なれは　白文とうわされ
愛子よる也
六庭をはなさきとに　二条院也
六条院の南　紫上住給し方之
二は文　白文は同胞の兄也
右大いとの　夕霧之
つりそれます　此白文ハ東路へつとへく云り

まつ法ひらり　好色乃成也
やりのさは　同し庭より此りのとも也
う姿りしうい　海よとにわるとさまよう縁と云が如し
六条なん　宮本の事よ白人よりせ給へり
さ海くつとひ　六条院のとも也
ひんりしの院　二条院東也
流そよふんふ　法不分之
三条院　朱雀院より給へりおにみより
今こさされ　明石中宮之秋好中宮よまは給
いさしよそ今の字をくりなと
世はおろひゆつねなく　門前零落鞍馬少は之

うしとしまち　　新蔵屋の住所也

こゝ家にて　　もゝ年寄

二条院　　ゆゑこと方れ人にて御り所也　家

御こゝろとみしこゝろ　二条院より白文二条院より

もゝ女一文二文なと住まつる

さいの文れ　　ゆゑこのゆゑこなどよどくして

まし海さあるすに情くこひまつり

春れ花の盛へ　　御なゝ春ぞめでこゝにて

花のゝあり　　蓮へ

二ゝの文れまつ云へ

さゝいの文　　秋好へ　　源氏蓮の事御戸蓮

竹ゝ所也

十四ゝ二月ゝ竹ゝ所より住

新ゝ十六歳秋中ゝよ住とゝくめゝ元ハ竹の

春ゝ年紀の新遠ゝ所ゝ所ゝ所ゝの秋中

ゝよ住する義ゝ也

ゝゝゝ　　住泉院の住給へ叙四位也

いのこれ云ゝ　　ひとゝ住ゝ

よ遠ゝ昇ゝ住也

冷泉院ゝ住也

おゝ寺ゝ

ゝゝ秋好へ

ゝゝ文ゝ

こゝれ云ゝ

住泉院ハ住ゝ

女房一百ニ相木の妹ハ泉院へ参りて弘徽殿と
ゆゆしかる服なり
ささいの文ハ　秋好中宮ハ次泉院北女房
をうづさ行ふ事ハ
業をとりてかづさ行ふをかどうさ
迦人のうを殿とも申る統めの
はて文の　女房ハ
あされたちふ　物未のうを也
ぬんきうこと　他流ハ大きとあり。
善巧ハ羅睺羅別名なり　未詳の事也
いろ海物未のうをうたなれ也

別ハつる　出生の事ハ云さうなる人
をなれを行俗さる也
いろふさ人りの　西日さ書ハさ也俗
おいてで言ハ未すを海さる別と
文もかく感のれうをり　女房ハ
いてうなれ　五障さ障りといんず
てなかづと書ル案ハさづひの
すさ行ふうん　物未ハ
内りもはて文ハれうさ海　内ふい女房
連校りて申ハ
ささいの文　ゆゆしかる中文也

書にうまれて　　葉のゝ氏源のゝ行ひとと
そのゝ行の人　　弘徽殿氏太后二条太后のゝ
つねよさるいとゝよ世氏　　左近乃事也
　　海家ありて八恩うて仇を報を
　　報をゝ行ひざる氏いとうを合ゝ行る時
　　行すと也氏流
　　後の世乃つとめ
　　みしりとゝめ行ずとんあるまゝ此事を
　　をこゝろ行ひるをいとり
　　ひ美い　　葉之義誉芳恵もるゝ実西乃と
　　いとこゝ氏世のゝ人とはつゝりいてさり事

佛菩薩乃化現うゝ也
かゝりけさ　　大品經二十七八十隨歌舞うゝ
四十二者毛孔出香氣四十三者口出無上香うゝ
打西ひうゝりゝんも　　うゝ所まひのゝ
白ひもゝるゝりけりと也
とゝもつけ行ひと　　みりひのとゝ也氏あと
ゝ氏ゝりゝられて　　白のゝさゝ氏事行ぬ
うゝを　　葉之義　　荷葉後花なりで云ゝでゝ
をゝゝ也ゝうゝ行ひす　　花ゝる行ひずゝ
行ゝと云ゝとあゝり行ゝ氏字法でゝむへ
ゝ也とありゝ白ゝ氏ハ氏の字習でゝ花ゝる

の云　如月の花吹ふきてうる秋風いめみて
秋と香こそ思ふ花れ万葉集の歌四うりかり
かれ尾とりにりのまてさろ秋萩とあるぬる
をどいれハ清香菊にとりてうく梨しれみて
えうりされで如月の花秋萩ハ蘭菊みとれとく
ふい白ひも形ふりの如ふい云とびつけ給こあと
ふつ云ふさまばトの相ふれをうりなどハ
とけハの字ようてうくみてうり

源中将　菊こ

やうにて菊さ　屋んこと形よこ
はしあうりて　菊の花ぬ

十九よりの詠歌　菊十四より十九迄より
家にみてうり次の菊ふみ云ふりて云ふものるを
をのつうりよすを　物本のすをにあるふち
て云撰もとれば云ふ実ふよみてまるこ
ひと月院の酒　薫冷泉院のさまひ給こ
まりかく人よめてう迄ん　天徳乃風情こ人を
あびよやすりの友よ云のびるもおりうくきよ
ふいとあ作ばるりり
三条家　女三宮の酒方也こまさうけ菊の
ハりさ酒をうふつされふ
ふりはう菊　ふりるよをいいこひがうこ

高氏なり　高氏女房と菖蒲の中に臥つる
所にすなわち　毛利殿の服とのり
一条殿　藤原家定
いけうう　さすがに奥深くしのびしのびつる
のうちにてうあつ　菖蒲二十本の所也
山河多勇士居たる　将軍に付奉るべき
きさいたち　明石の中宮の服也
進ぜられた　山名伯耆守時氏
左衛門督　左兵衛佐
のとうけうや　あるざきるたの膳ざて倒
宰相中将　薫いたる　芳ぐるにうく

うりあるに付高人へいむうそさる也
そうとめ　車也
忘れ　酒下也　猪傳乃山也
りとめこまひて　風俗の名をそめをりて
めこうける也
菖蒲のやうなる
たうこうあるに
物新うあうう似る
太乃もけも　夕雪伯薫いまけ方なれど
山寺にて別して　乳りり給ふ事也
弥はまする　弥のまする求る事二度

の指也なぞくい例の俗名也親しき名葉下
まうびるさるのとうなる音はよ用ひさ也

八終

紅梅

巻名以詞号之白宮乃巻也並乃一也或説
竹河を一の並とせり並ハ薫の初ののは
ちりぬるのあはよりてもされとも只紅梅
竹河と次第さるよりは並ハ豆の並と
なんいうり但横の並とも云つさるや薫ハ
一ハ二歳の事也並る三ケ条の異あり行
巻とけまをとい十七八ケ条乃乃也
其ハあせちは大納云　けけんの梅は太
大臣ざれどあの宮梅(ゼチ)家の大納云ふ
あり〜ぬよ人は云ふりしる分をなる

[illegible]　御堂をよこ[illegible]稱うそ[illegible]人々
[illegible]のい　雅人とも[illegible]
[illegible]　ひ[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]院あり河海忠仁公を[illegible]
[illegible]さおいまうち君とうけ[illegible]あり[illegible]
[illegible]　[illegible]
或[illegible]　[illegible]の祖父也
[illegible]のこと　[illegible]多あり[illegible]
[illegible]て[illegible]　[illegible]
[illegible]　紅梅大臣のれる也

[illegible]の法方より
[illegible]　法[illegible]　[illegible]
[illegible]法[illegible]　人の数をうきり
大[illegible]云[illegible]　[illegible]
[illegible]法方　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]人[illegible]　又[illegible]
中[illegible]　望をうけ[illegible]人[illegible]
[illegible]　[illegible]中[illegible]也
[illegible]の[illegible]　[illegible]の女也
十七八[illegible]　紅梅乃[illegible]也
[illegible]の[illegible]　白也

けるこゝろ　　桂殿の腹乃ゆゑ　白文めし
まゐて　行ゆゑ　白文の翁
せうとをうて
さすんと　紅梅大臣よ　行ゆゑ也
いとこひあうと　紅梅大臣の白
みすれ弥の
乙女ゆゑ源氏の　行ゆゑ　まゐ　ゆゑ
伊勢の大神宮　まゐ　ゆゑ
必ず　白　大臣弥　ゆゑ　ゆゑ
氏の人ゆゑ　白　大臣の　弥代　乃事
ゆゑ　ゆゑ

紅梅　桂殿の　白文へ
桂殿の　白文へ
行ゆゑ　乃　白方
ゆゑ　ゆゑ　中の　白
こゝろ　白のやうゆゑ　黄色アヒ　白
なゝひ　行ゆゑ　文の　白　中文　ゆゑ
ゆゑ
ゆゑ　白　ゆゑ　姫　白
ゆゑ　紅梅の大臣　用　之　音　宮子
ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　紅梅の大臣乃　弥　桂殿の　白
ゆゑ　白　ゆゑ

物のしたり　実方に差別なきまゝきたる

さうよ　毎夜の御

いかなるまゝ　紅梅大臣の公

ゝゝゝゝを　御消息さしあはせしうり

とゝのいをあ　毎夜毎夜あるうちにてと

よれなるのうよ　吾妻はまさしき人もあり

けうとそのゝゝゝうり地

月はいかゝとの　紅梅大臣の御

ゝしの方よ　中将云

なまかしかよ　琴笛を評して書り

源中納云　恙の昇進家をたゝみしうり

紅梅もたゝうへ　大臣の御

ゝゝ姫人さへ　ものゝ人

ゝゝゝうりさ

まいをいてん　紅梅の嬪女恙へ系図ひしへ

ゆうり実て　小方にゆづるとゝみのゝ云よゆう

ゝゝゝえ　嘲へうてゝゝきてしゝゝゝゝゝ

物よりゝゝなゝ

のゝをよ紅梅

表ひるゝえし

けゝうりゝて

実とゝさんう

恙のみとゝあり

昔ゝゝとひかゝゝ

河海大論と引り

ゝとゝてみるてゝゝ

ありて　まゐりたるとあるまゐりの字無き
あり給と先とんとこ
なれども　白文は別まゐりを出
中文　白文中文より出たる杉箱は奉納
うちかへて　二条院のもの
表変り　白文乃羽
時とまれて　姉妹の奉り給へるもの
まゐりは世話役　為兄の羽
筆人　白乃羽れまゐ　あはさまひらとも
我と人意のと　白羽紅梅大臣をうゑみ
うまみなり

ひんうとかあり　當年のはじめ
うちかへて　白文
そのよにかへる
梅を押しての絵り紅梅咲ひ
をれとれるものゝ　ひ枝は色も香も異なること
ひ枝乃あるゝい　文の兄はすりすり白文
不審し給り
ものゝ　為の羽
白人人は　あるゝ兄月と兄と月
くゝ白道論人　すりゝ世ものや
ゝ方さ版　紅梅大臣は音寅の中兄を
白人まるてさの白あ彩

白玉は白の玉は黒よ深く色ひ[illegible]
音さやうふ　玉の音よ白ひあるれよ中元は方
とはげやうにものはげさること也
花の香り　うそれるに元年行り
さてなし　大原へ行をたづねみちびくべき
中をあるとりかくしひまと
うひあるさ海を　あるの元乃ちよ什家の元を白
へさいせだやとそとも
いとむやうふ　藻屑の女法を富しかつ也
色ハさのあ　ふへ弟せまと
はるけよと　大原乃羽と

花のはるとまれるる　夕雪や行梅大原乃月
春ふかれ実法をとそ行とと
とあ香花　白玉ハ元の白ひあ法へり
まりませ物も白とます〳〵と行中元を春
ふつきとり　大実行中と
はるとさめ　大実行中と
花の香　是も砂界よ云の行り
水方　梅雨也
人ハなと　ふ花ふの元の方ひと人の也
玉ふいと　玉ハ東ふ花雨ふと也
水方の浦り行ひ

はし梅也　紅梅大臣乃詞さ源氏にましとそ

おなし花の　梅は色ある寄物なる白氏あるとそ

源中納言の匂ひ云出し給也

これ宮をさし乃　匂宮梅を執し給へるとそ

宮の御方ハ　宮の御方のうへ也

さしむかひたる　此宮乃忍ひ宮の御方よし海さする

にほひそのぞこ申人もなくて紅梅大臣の御女

の宮へもやかおり給へりされど此匂宮ハある

かたよ宮の君よ御心ざし移んほどなりとそ

宮の御方に　匂宮ハ我身よりこさひなる人

とそひなふなり

源へんかけ　紅梅大臣ありかちよ忍ひ

めをとく云げ幸給也

何かハへ此れありき海　北方ハ可宮事に

云ひ行へり

八宮乃姫君　宇治の中宮此よ也此あ

よりの宮く離乱せりまげうらひ給

よるよハ椎本出居りわすれり

はしらかり　母君ハ時く給にゆ給へり

竹川

巻名以歌并詞号也横乃並也又末ハ置れ
ぬ〳〵薫十四計と書て次の巻四月より
七月まて書て又次の巻れたるもあり又年時
ありてとゝまくうつるところなり

光ハ源氏のれそうにも　けぶりの消ぬふ或ハ
作とゝもそうそれ人のいつるものの指ひ
源氏乃れそうにもとゝるのれとゝ紅葉流ハ
思ひとゝよあゝ〳〵むうゝをいりゝ春と舞
黒乃宮あまたひ者ぐろれあゝとゝひり
むうゝハ源氏の形ニ実よあゝぬゝ也

のち氏太との　おりみしらり
ばその　ばふとと源氏の於子すそ壊み山道
玉鬘の於子すて壊ふらひたまれ給ひつやうこゝ
くえらりさて如さあれどいゝらり花宮統いゝ
ひろ千先のまり里　花宮にまゐたるさ給ふ語
我よりも逢氏数　若さる女房先の云ふる給之
いつ達のまそと　おもと波して或了手内語之
内侍のかえ氏の服よ　此以下玉鬘氏すそに了
おもしすくうせ　験果の夢見し給へる之
いうきおもしく　内氣りのうすなふへし
くんの宮氏れをさゆり　我仕大臣ぐさ氏みる之

しょりを志てしかてさり　擬逢ハ我仕
大臣をつれてひのものもおりりしとめ
おとれなさけ　抗言(カウゲン)令(ケイ)色(ニョウ)なさき之
むつくしさ　をされくふあるさ
札昔ふろう哥　むつつまそうらんあり
中宮　明石中宮之
太大辰　久秀も大切よし給之
姫宮達を　むつうつの色
頼とすひ給ひぬらん　頼とすひ給家をそ
うらひ行ひのくりよりしめる之
中宮　明石中宮之

はるかめをそらめ　上陽人の羽
今なまして　北条院よりの位の羽の位とさり
ぬるもの也
いとあるなり　むろまち殿
うちのとく
人かるもいと多くかりし　かりけ家
云云のしるしなるれど通はのまと
いかにかよつをても　久寿の長義人おわん
むかしのとのむろまち源氏の羽なるれば
うんけ殿も　むろまち
はく小弁方　をもて弁殿

いとうろひろる　演官をいとうかりゆる
すかとい親眼なるをいて
姫宮と　むかしの丞春べすの云云と羽遊
言ちうちいりけるあるべちふの羽ひと
次のと義人の羽屋をもありてゆるしてと
こよなきるとい　をまべき事とい羽
ひざれたとすう
安とつく人も　自殺をみとり羽へ
きこかのまとうつく制止とうへまり
六条院の　けとて業のまと
四位侍従　業や十位ひとあるい自家の

其氏始りわかれり
志野の三条家と
家ハ女三宮の末之
六条院の流をうけ
なすなるゆえ
ありしう物字ゝ
ひ月の流いふ
なる物ことのしよ
こゝしく此太郎
ぬかるもりもりしめて
遠の頌ありれ

志野とハ玉鬘此家三条
薫ハ源氏よ近しといひ
玉かつらハ夕霧の祖を相続
玉かつらの派方へ余わかれ之
此大納言の流よ書り
是も蔵中納言の流よ出り
夕霧をとりり
夕霧の孫遊君帰をもす

遠かるとなり
むかすおりそ
甚とくなくて
いましめ
今かく
ゑまし
の遺徳となり
流よりの絶えするなり
あそ作之
肉よ知せし箇く
そもそく女一宮の女流ハ

姫君のすゑといひ伝へ
夕霧の祖
年ふるべきゆゑとしと也
玉かつらの祖
源之かやしれとかくひ絶ゆるも源氏
志野流より姫君の
夕霧の祖
志野流の女流越使

[illegible]女房のはれ毎に女房と申すべき
女はうの　むらさきの和
これうの道とて　むらさきの代の方に
三条殿　女三条殿のはら方に女房ゆ侍者
[illegible]　[illegible]
すさく院のふるまい　光源氏朱雀院に
源氏いの方につぎて　女三条殿とかくなる
いまだそまつる也
これとのくたをゆね　むらさき脇に殺害乃
ほそ三人に
ゆつまて　業[illegible]の方へ[illegible]了

[illegible]
[illegible]　白ひとと者と
姫君とゆゆまと　世[illegible]姫君も
ひくてきとなり
すう色者ゆまりき　あまり[illegible]
[illegible]
[illegible]　色くさけをうへ[illegible]
[illegible]　ちとにとき人也と云て
[illegible]
[illegible]
色者なれやうの[illegible]
さこの袖ふまく　袖ふまくこと[illegible]
色ちりと　色ちりいんくの云[illegible]

まめ人とそつまれられ　蓋はれのこに安身
あるの乃仕様　　昼寝もいまゝ世ざるゝ
こゝ家文人ハ文芳のれとり汁ふ乃り様
而くの乗賀も世ぐくひまあるう
如くい　文芳のすも也むうくの利
仕方あそ　蓋之
うくさまにて
ムりくる　毎之めでくる
仕様乃表　蓋の表
茶仕様　むうくの表仕様
松の女郎　蓋と月歩様

ちんてんの西面
ムるきや
いさ志ハ様へ
つまとそあ事
あれとにく
いつゞみくき事
とハりあるも也
ひなにく　仕様題すぐれるうまあ
みしゝり
仕様の表て
つまりこゝり

ほうり書り
蓋の表
蓋義人のおるよの様
うちれ女角
ゝゝるにるすゝ女れ方より
ゝゝゝるもくつゞるも也
仕様題すぐれるうまあ
あるゞの仕様
むうくれ表　蓋にたゞめて

彼仕方たうせ彼ものみしうり
はえいあやうう　物あに仕うりと
ものうりする人も　支配する人もあり
とかさを　彼云をすめてうこと花こうる也
同一色う　何酒祝めるまで同類ようり
うこなる人
色ひのすうこと
うけひすう　業ゑど酒を辞しこうる也
なふそりよ　何ものでつくるのこひようけ
ぜとこうこさめを辞しこうる
こりむまやうて　行何の人器ものれ何うこう寄

あれびうとりあうきくのうりだうこうとあうひな
こうこうり
人のこう　人くい源伯ほよこう梅ゑべうと
ものうや　ものの中よりうこう花の白づり
よこを移すこうこう何ものもものうと表
とこうづりうり海こうこうこうこうこうこうこと
よ人い　業のみ氏祖
こうこうて　むもこうこうて
ものうりうり
竹河乃　こうい橋と寄の猪とをかひうり
彼云をゆうこうこうの云もあ所也

これ見給へ　むかうのはまを見給へ
よくあむしまや所　見物あむしまやなどと
うり船ひきをんなどもとゞめ
竹河よ　吾方を早くして蓋をとゝのふる
けふこれみを　蓋の袋行燈の書付うり
みする所なり
はまをうるつゝ　人をげうあるかれい姫蓋
遊廓をうかとゞ　みをこゝ行つり　姫蓋遊
十八九乃殺や　姫蓋遊
今ひとゝ和　中の内の姫蓋

白ひやうろをうひい　姫蓋い海さり移
あつこれ蓋きんて　見物也けそ同
あよ蓋　行燈の見の中物弁の蓋二人
中物　場よ蓋遊廓之家仕除るとて
弁官いまいて　家仕よ除なくて出すに
をこりて和しく　家りこざると也
うち海り　見のゆ物乃和
こゝこれおたこ海さまこ　内蓋りのるゆと
二十七八乃殺り　中物
けれるさ海た　姫蓋蓋行燈くよるこ紀と
はあの花れ木た　姫蓋遊切せこ五殺り

うへにはうつくしきうへにはうつくしきのと
さぐめ行のしるしの事
いとさかなのさかねと　　鄙の酒の肴
道のすいかのりしうそうと也
人のもと　　中将の事也雑人のもとことのみも也
花よりとあて　　花たちよりもまさりてと
おりてはけるさかな　　むかはをとひ物行のあと
けるさかな　　兄弟を遣て中将なと
きこえ　　中将をとりとりて行のと
いさやたてめとり
に乗り行の岩　　夕方の月に女の姿

とれ物也さかりに行
橋をとけ　　花をる王朝公ゲ事代ひきり無
ある事之文字治よ菊をとり和よするるもを
まいりのあ　　義人のあるとに行行
方へ渡り行て
歩つまく　　行長をとも中将弁兵衛とつま
て出行なり
橋いろ　　帰京
たうとせ行ひぬ　　いうとれ京後のと
こなりらさう　　言葉の楽と鶯乃時に
の後うにいこれ楽をそ面と共ありに

くゝ云ふ事なれども
何事と　おれの方
さてもゆへ　そんな海なれとも云ふ事を云ふ
なんとこ吾方おいうるせざる事をいふ
宰相の云　あるこの云の方也
風にちる　まけじと風にちらぬ花は
とも世界なれなれ　枝なりの木なり
吾方にちとすり
さて花　神のありやいづくゆるんと
出せんけよ　あれ奇のものゝとぞ氏名を
くいつよ月日なる　とくして姿を

女一家氏母女はこうと
なるうとくしく
くゝい家を云ふ　数之の行ふこと
うのまに　次高流の女はをすくげ
ゆ
ゆ
母中氏方　毛井乃氏文の和
いとかさいつる　毛井乃氏
あり　和方も　人のよとこの行もはるとこ
ゆ　むうつの云也
いろるとこ　むうつ氏和
なとこは　いりうと　と云ふ云ひ稼ぐる形よ也

つれなくて　うつり乃しゆん

へいかり　おかねのこと

逃いつる梅　朱女房逃之おかね代文など取待ふ

為人なり

うえなり　むろう代はおかね也

ほとゝぎすしきり　おかね之

これまへやるも　中たち乃女之

つるまも　引出来勤之　ふ出しく下ニうく

車もとなをしつきそれなりにくるみなり

けつけ丹の此者の切へ

ひやうへさ　おや　ちやくとまりくるのおそれ也

うれなくさめ　中の姫君をと云なみこ

けうのふの文くれ　中ねの云之蔡升役ふ附あり

おみおくべきく役ひしおいりとの君も云

うつ海まじきてをかくとあり

ここしめさせうる　此中ねの云之のぶさ

役のしとむうべしへかてかへ之

いてやさわれ　為人おかね乃相之

おいらふ　豊ふいとふとなくうきと云道家

その藤にと云々之御そなとりたりし之

いてやうかり　北泉院へ参り役なく音なし

報なりぬゆへとと之

まりのや　さくらに乙り海ゑせざるなり

ゆくも曲あるまゝ　ゆくまゝ　さくら地

表とて　おれるの奇こ我いさ死と表よ

まもるなり

みの月の和月　　五月の平産などあるべく

毎月月方　　乙こ井戸こ

新しき　　久寿方こおれるの乙をとけるる事こ

新つる　　金法よこ

さいめんの　　四月百よ浜金法の時おれる

ゆくこびのまとこ　　ゆくこびあるまゝにゆくこ地とこ

さて迷いの乃　　蔵八おれるの奇こ

いさまるまと

とといひいさ海のと浜切こことにのこは

あるこびいまこるゆまを中れる表ゆ地

そりこありて　　中の姫表とこ

新もひはは　　花をこて表八こ川の乙こ

今日そ所　　乙東にとりかていそ所前

ちる人のこ地と百そ和と空おがれも強り

あるいと新　　傷の人ゆいそり

九日にそまりは　　四月九日こ醫乙の婦女

院乃表法よ乙り　　法の乙極由是不ゆ例こ

乙大義　　久寿こ　むこ乙見乙人こる地こ

小式部内侍
あやまちて　雲井なる
きやうなる人とい義人のあるこそ姫君乃
れ給りのすを井掘らるをいとり
ゆり　れ給のすをそなたこそりもおど語り
さを給へつきすもそあるものをとこ
おとうなる　さもぬやうそれらるとこ
ものうも　久雲うりの文は翔
てしむるは　知いこをなるへ
みさけハ　おうてはもを
大弱云爲　行海のこ居こ

小式部内侍　は姫君の枝桂の云と別腹の兄弟
也ロ海　行海ものも姉なるとこ
爲中弱そりを
兄弟ハ　ひけ兄の悪枝桂同腹の
為信　行いさをを枝桂同兄弟なれど
とのこ　ものはまをこ　人くのこ
きいろ人り　蝶せ中れは物とも
友のおりの行の
おくこ小方は　は義人かれいを毎お具てく
いあきこ人そ何るは代こ人こにくもあきに
う海こををするは代の間をとをこのおくを

まことにうつくしきことのかぎりなり
なりてかくこそいひつるなり
こうとあるを　　おほけなくいとかたじけなし
つまとあるし　ねをいとり
あてよ　　ものめたらんかぎりの命の限りをも
さらぬ世すべての世はあはれにもあはれとおもふ
いつなりとへよ云ふこゝろ　なほとも知らぬ
ゆくへをかたて　今日限りとあり　ねをいと
ういひなれ　　中ねるよの限りを
かたりあう　　おもひわびぬる
ありとあるもの　今日流へ　ふり限りとなげくと

こちらより　　なげてみる限り
なりあるこゝ　　命をしなべてなげくなりし世
月はつねなきものとこそいふなれ　こゝろにもとゞまらぬ
こゝろにて引用ふるこゝろ　　ものとこそいふなれ
やうこゝろにうつる　　ものとこそいふなれ
いきるよの　　今日を限りとなげくこゝろ
まことにも一言をもうけ給はりて命を絶へきこゝろ
はかなしよ　　季札うるこゝろ　河海ありみこゝろ
豈以死倍吾心乎云語意用
うこゝろも　　報恩のはかなき
うこゝろく　　書改めずして取りけるこゝろ

おとる　はつきくのこと
かはらの方に　むらさきの上見申女房
うつる　北泉院也
后　秋好
さく人　院のはるすゑ
うんの表を　むらさき
くもりなう　院の御也
これはさまと　髭黒の北方
さきをいひにをくん　むらさきの方
北姫君はいつ時　みえ給ふ
まゐりあひ　いとゝ心げ深
てふさく　蓋の奇　松のこゝろあり吾子
御心ゆるあるぬ　御心のまゝきりのとき
せじやとこゝろ　蔵人所
ふの　ふの兄弟のるかのうまれ
但せざるもと也　蔵人所
まあるる表　蔵人所
いとこゝまゝ　蓋の
たゝえをつ也　蓋の
をいまざるなり　かるゆ
院まゐ　おなじ姫君

うらみて　故郷を思ひ必用意すべき事成
云垂れのよろこびうづ院へ参り給ひすをに
行くべきを也
中務をめして
此度色々こしらへ
を語り申給
姫君の兄之
中務母上より伝れ合
却て
いさや今　むかしの恋
けうの事よ物を女院たりもねん法の法一道
これもさるべきよ
うのむかしの
中務の母

中宮をとうり　明石中宮をでうり法の光院
みい女院ままをい是を用ひの事なるべしと
うらうらやみやと
院の女房を接ぎ
に光をとも所もあるべしと
よりみさせ給ん
みさを　中務と弁と　むかし逢
さまの浦なさ
のまさををいう
をとりそう
人の多りを
いそそ　義人なる所ひそりけう
とりとと
弟子法院

物うえうあるも　物うえうしゝ時和琴
を引しめ給へる人〳〵
はゞ（ヒン）おもう
家を所も　今の姫君をはめて家を所と云り
あれたる所ちれたる所
の人のもとゝ　久寄殺仕る所也
此院をゝ　泉水流
こゝろすんう　姫君をこゝろにくしてひつる
竹のうらもひて　さるゝ所のすゝをとり
うへも　泉水
ひとりとのゝ　おれる所の見ようゝとり

うゝとり　院の御所の御所の
まとの戸口　菅之竜之竜をとりる人〳〵
一枝乃　踏哥此歌乃後也
桂のうきをとる
　　大内の或年行るとあり
　　義男あるゝ桂男ゝもたづきていなるゝ
　　此院中にくいさ殺すみとされとゝ流ゝ所
　　ゝも此年を用ゐ
　　院中をいり
　　おれのすゝとゝ所
　　菅のすゝを云出
　　月ゝ人今すゝ
　　月ゝはゝるも

竹河乃　昔あそびしりたる所と
そ早りしる所
あるとくまろく　浪くさよやたろ和あるり
とろろに波の高ろ
なれてれ　葉の高く何りも和むるり
むりく成さりりと行来ハと
人のやうに　おれ和やうふと
うちかすく者　葉の色
あるうこ
ろりたく　ろりに猶りもろぶーと
院の所方也
右六条院　流れ葉よ猶行り

右れ和く　久寿と申ハ如来ハ事也
うりりりさろ家て怪よりえり
家ふ所のはとれ者
ろり院のうくせ行るなりへーと
うと　つけ物ハ
うくれりの　曲ハ楽乃曲也
うろりろ　以下巻名也
卯月よ　七月ろり和懐姫
れ中ねり表の　女ろうりくせくーきる
の出まめ表ぶれ中ねれ中ねりるとを
きふとむろハあり　ろりるすに云ふと

ゆかせ給ふにて
公役をさせまゐらんとて　譲位あるこ
大臣けいとうこう　内侍の尚侍職ゐるさ
まで むろまちも辞せんとおもひ給へれとも
なほよりてゆるしをたまて譲位あるこ
右おなしこの　舞楽こ　翻玄の事ゐれと女官なとハ
さとをりぬへしとて譲任あるこ　殿上の商侍の
指図実房卿　公他よすべれうきて　ハさ
やうの方にもよせあるこ
はえ　中務卿内侍のこにぬ給へつきす
くせのあれいうゆさして　堂上ゆ人ななて

むろまちの辞退をもゆるしまゐらすこ
弁卿　むろまちの　羽こ
内うり
内はいかうきの　夕雲の歌
大やをはとに　後鳥羽院こ　ゆ
中宮　ゆ　こ　はとこ院　ハ女はの
はかうきを　はのこ
なるこ　殿上のゆをこうり
帥卿　こ乃はこ
さはのうんはこ　内侍のこを譲位あるに
よりてさきの字をこうり

さくは　姫君ちりて　院のほけきうれ候
院にはまつりては　院の御仏拝みけ給ふ寺院
いましめをとひ
出御なりてあさましき御長承へ来りける給はざ
御ありけりて御かたへ給ひつるあり
さるほどに　院の御心にはまゐるべし
承りをむかひより　宮寺亦にて候
くんの君は　むかふ中の君に横れあらそ
ひの外はもろせ給ひしを
手にありて　家また手をかなと見しより
世のならひして　世方のかはひか世のうたし

たらをはらふ者
おそらくは　むかへて
ありのまゝ　果て
申しくられ　前人へおはしをはじめとして
御長承まいらせしへ
宰相乃中将　白文字まで草十九方文字
相とかえより
なんすかきみこゝち　業を鮮よと出
つきぬるをきて入給ひぬとて
おねなりし　前人へおはす
うちさけるつ　院中にはくせりてきさるといふ

これ中ね　義人のかなしみ一人こゝに中ね
たゝ長　氏族不言明こゝ系畜ゝ竹河ハ
たゝ長とあり
みちのたゝなる
新編ハたのゝたゝなるひゝちをびのうごとゝだ
りもありんと思ひ
内ハ元い　内ハのゝ
たゝ長　あゝりみゆ
たゝたり　久寿のたゝ長ゝ
岩大明元　河海岩大納言のゝ
おのゝをのきりおもあるゝ

けゝりゝ中ね　義人の中納言のゝ紅梅ハ
あゝ通り
これハそう　清夕寿の一族ゝ
おゝ人の通ゝて　親眼ゝるゝたゝりて海ゝ
ゝん元　むゝゝゝ
むゝのゝゝ　源氏ゝ
ゝれい院ゝゝ　義人の子ゝ　北泉院のゝ
すて給ハぬゝゝ
ゝゝひゝ　義人の紅ゝ言分ゝ行ゝゝ
いざれゝ出給ゝて　めやゝく　ゝ
ゝて給ゝめゝゝ

とろうるつと　はんぐろよそ屋をとろうる
罷り云の所のつと
今日さとすきしける　むろうの殿方乃
ふうろう姫と
生のめんなくて　人倍みいとがうきと也
院よさふろう　皆是不思
何うさみる　如此結構也
交さう　と家誕生の交ーうら
うろうろくて　はは是不思よ至なうと
さうに　業乃殿
さうりの海られ　むろうのすい如居北ぐく

せうろうの事あるまーきと並ると笑ーー
はたて出立ふうと
ふめんのつのてう
あいの　あうくうきと　むろうの殿
人北おやうて　むろうをいり
はは是不思　業のとーかりはと
うち北ひめ云　字治八交の姫君あけまと
さの云の事すう
ちうもみまーん　むろう北屋業と舞
いくもうまーうと
大原屋い　紅梅大原屋

ことよの　むろまちの殿おなじく
長々文たのおかいとの　相撲（スマウ）のすいみを
定ておよありしゆなるべしゆうはすに
自家のはなしあるつる例をもて引ものす
一つよ殿の　お稽古殿のもと
文ろう　自家こをとめ殿はなさること
おもしろ　紅梅殿同ゆ方こ
ものはなくのこと　むろまち殿乃東
なまはとのりもこ
昔のす　謡曲の大饗（タイキヤウ）はすこひ出殿こと
古文せ行く　長々文のすこ殿城

殿の家よ紅梅殿
ひ事文はは是ものかくはなりそてゆ殿
里世乃はりさ殿ゆとむろまち殿すこ
たの乃乃事相中ね　義人のね
大やきの　畠を
廿七八乃程　寧相中将のすこ
ころ乃は　むろまちの乃こ家よろすこ
いますすこ梅や　まいまやとこ
ことのはも

謡曲こ殿まいまは世のは
吾ゆ通もゆうはは方よ義こ殿ものこ
右長嫁婿　さはよゆねとこ人こ景こは

ゑの俤なつかしうおもひいでらるゝ

ゆふかほの　年齢いまだ竹うちとれと毋氏法

たうとい昇を拝みて不思議なゆゑ法師

寧和いとかく　夕雲の是事稍牛羽也むらう

の方へ孔つゝくむもあれるをいるゝ

みゝ昔なつかしけれとゆゑなしとをいふなるへしゝ

羽耕雲の事よいとゝ